AACK 京都大学学士山岳会 No.31

Newsletter

May 2004

http://www.aack.or.jp

目次

北アルプス大日岳山行
—事故が事件になった、どうするか、登山家として、科学者として—
荻野 和彦
岩坪 五郎 ……1
西蔵旅游消息
笹谷 哲也 ……4
アンナプルナとマオイスト
阪本 公一 ……9
ヨーロッパ山スキー報告
高尾 文雄 ……13
ヒュッテ管理苦労話
笹ヶ峰ヒュッテ管理委員会
秋田 雅規 ……18
【理事会決議録】 ……19
お知らせ ……19
会員動向 ……19
編集後記 ……20

北アルプス大日岳山行

—事故が事件になった、どうするか、登山家として、科学者として—

荻野和彦・岩坪五郎

去る三月一四日から一七日にかけて、北アルプス大日岳にスキー山行を行った。

この山行は、二〇〇〇年三月に大日岳山頂で起こった雪庇崩落事故に関連してこの山の地形、積雪、植生を概観し、事故当日のルート、行程をなぞってみたいと思って計画した。後述するように山の事故が事件になったとき、われわれは登山家として、科学者として何をするべきか、何ができるかを考えてみたいと、小文を取りまとめた。

筆者の一人、荻野はこの山に一九八一年五月にスキー山行をしたことがある。室堂乗越から奥大日岳、大日岳、早乙女岳を経て馬場島へ下りた。念のためにと持って行ったアイゼンとピッケルが奥大日岳の上り、下りに役立った。当時のメモにやせ尾根、ナイフリッジ、アイスバーンなどと記している。しかし緊張したのはそこだけだった。あとは坦々としたスキーにいい斜面が続いていた。大日岳山頂付近は広い尾根、優しさを感じさせる山だった。

そんな山で大きな事故が起こった。二〇〇〇年三月五日のことだった。文部省（当時）登山研修所（文登研）の『大学山岳部冬山リーダー講習会』の一行が山頂付近で崩落した雪庇の上に乗っていたのだ。十一名が落ちた。残念なことに二名の研修生が帰らぬ人となった。やさしい山で大事故が起こってしまった。なぜだ。

素朴な疑問を懐いた。

プロの山岳ガイドで登山道具の専門店「岩と雪」の山本一夫君が主任講師を務めていた。かれと亡くなったふたりの研修生が属していた二班の講師、高村真司君が書類送検されたと知ったとき、いいようもない衝撃を受けた。山の事故が刑事事件になってしまった。亡くなったふたりのご遺族は国を相手どって損害賠償の訴えを起した。事態は民事事件にも発展した。

日本山岳会京都支部が中心となって、両君の支援を全国の岳人に呼びかけた。多数の人から両君に対する力強い励ましと、支援、事件に対する貴重な意見が寄せられた。

この山はどんな山なのか、かれらはいったいどのように行動していたのかをくわしく知りたいと思ってい

た。

計画に参加したのは田中昌二郎（ＡＡＣＫ）、日本山岳会（ＪＡＣ）京都支部、日本山岳会アルパインスキークラブ（ＡＳＣ）をリーダーとして山本一夫、高村真司ら事故当日の文登研講師四名および関係者二名、ＡＡＣＫの岩坪五郎、荻野和彦、ＪＡＣ京都支部の四名、ＡＳＣの一名ら総勢一六名であった。山本らはプロの山岳ガイドである。このパーティを支えたガイドチームは今、日本でえられる最強のメンバーであろう。一般参加者は大日岳事件に深い関心を寄せ、山本・高村を支援する者で、積雪期のスキー山行ができる人に呼びかけた。経験豊かな人たちであったが、ご多分に漏れずかなりの高齢者集団だった。

ルートおよび日程　二〇〇四年三月一三日（土）夜半までに全員が文登研（富山県中新川郡立山町芦峅寺ブナ坂六）に到着した。

一四日（日）快晴、登山研修所を六・三〇出発。七姫平までスキーを担ぐ。

七姫平（七・一九）の積雪は約一ｍ。スキーを履いて人津谷に入り、登山研修所千石前進基地へ。はじめ林道を、やがてスギ造林地、ブナの雑木林を行く。一二・〇二前進基地（一三〇七ｍ）に到着。六・二ｍの雪標が立っている。積雪は四・一ｍ。建物も一・五～二ｍの雪を被っている。少憩後、前大日岳ダイレクト尾根を一五五〇ｍ付近まで偵察した。斜面にブナが、尾根にタテヤマスギが混生している。ブナは萌芽によって再生した株立ちのものが目に付く。炭焼きに利用されたものであろう。ヤドリギを付けたものもある。

一五日（月）快晴、七・一八前進基地を出発。尾根をたどり通称雪見平（一五六六ｍ、九・〇六）を経て、前大日岳（一七七八ｍ、一〇・四三）まで。主稜線に達すると急に積雪量が多くなった。一六〇〇ｍ付近でタテヤマスギが姿を消して、オオシラビソ、シラビソ、時にコメツガ混じる。ダイレクト尾根のジャンクションは山頂に雪の吹き溜まりを形成していて、地山の山頂より北側、風下側にかなりせり出している。前大日岳山頂に雪洞。掘るのに約三・五時間。雪洞は二・五ｍ×四ｍばかりの広さで八人がゆっくり寝ることができた。天井の高さは一・五ｍばかり、天井から積雪表面までの雪の層の厚さは二ｍ以上はあると見積もられたから、床、つまり雪洞の底面は積雪表面から三ｍ以上の深さにあった。こんな雪洞が掘れるほど雪はたっぷりあったが、それでも事故の年と比較すると一ｍ以上は少ないという。

ＧＰＳを使って、前大日岳の三角点（一七七八・八ｍ）の位置に立った。驚いたことに積雪表面のピークは北よりおよそ三〇ｍばかりのところにあった。早乙女岳との間のコルでは積もった雪が北側に大きくせり出している。

講師たちは大日岳山頂付近の調査のために出かけた。残りは雑穀谷方向に下り、スキー練習。時間的にはたっぷり余裕のある行程だ。

一六日（火）快晴、強い風がひゅうひゅうと音を立てる。六・四七前大日岳の雪洞出発。コルから早乙女岳までの急斜はアイゼンを着け、スキーは担ぐ。忠実に尾根をたどる。早乙女岳は顕著なピークがなく、傾斜が緩やかになると尾根が広がる。進行方向が北東から東に向きを変えるあたりで、積雪表面のピークが地図上の主稜線よりおよそ三〇ｍ南側に偏っていた。早乙女岳（二〇五〇ｍ）を越えたところで（九・一〇）スキーに履き換える。一の谷の頭（アタマ）を経て大日岳頂上にかかる斜面にスキーをデポ。付近のオオシラビソはわずかに梢端を雪上に突き出している。時折、ハイマツが顔を出すようになる。

大日岳（一二・五七～一三・二五）では全員が亡くなったふたりの冥福を祈った。

地図を見ると山頂の西端に三角点（二四九八ｍ）があり、最高点（二五〇一ｍ）は東南方向に五〇ｍほど離れている。

無雪期に西側からアプローチすると最後はゆるいハイマツの斜面を登り、三角点に至る。三角点からほとんど平坦に東に行くと最高点に達し、さらに行くと大日小屋に向かって、急な斜面が落ちていく。山頂のハイマツは丈が低いので、見通しを妨げるものはない。

しかし積雪期になると様相は一変している。山頂に積もった雪は巨大なドームを成している。ドームの頂上は地山山頂よりはるかに北に偏っている。その巨大さは吹き溜まりや雪庇などというより、積雪がつくり変えた地形、積雪によって造りだされた地形とでも呼ぶのがふさわしい。

山頂斜面に立つと南側の眺望はすばらしい。薬師岳を正面に黒部五郎岳が望まれる。目を転ずれば遠く白山がみえる。しかし北側の展望はまったくない。雪の壁である。前に、

左右に凸型のドームしかない。展望を得るためには山頂からほんの少し東よりに進まねばならない。剱岳、奥大日岳、立山連山を望むことができる。ローソク岩を上から見ることになる。大日小屋も今年は埋まってはいない。切妻屋根が見えた。

幾許もなく引き返した。前大日岳の雪洞を撤収し（一四・五二～一五・〇九）、前進基地に降りた（一六・〇一）。

一七日（水）晴れ。八・一五前進基地を出発。人津谷、七姫平（九・五一）を経て文登研に無事、下山（一一・一八）。

人津谷、早乙女岳を経由するこのルートはひたすら長いが技術的に困難な箇所はない。一部でアイゼンを着用したが、ほぼ全ルートに亘ってスキーによる登降が可能。アクセスが容易な割に多くの入山者で賑わうということもない。のどかな春山を楽しむことができた。晴天に恵まれたこと、強力なサポートに深謝。

今回の日程は事故当時と同じくなるように計画した。すでに述べたように、時間的にかなりゆとりがあった。ルートの偵察、スキー練習、調査などに当てることができた。この余裕を有効に使えば、初歩から高度な技術まで、さまざまなレベルの研修プログラムを考えることができよう。静かなこのルートを研修に選んだのは賢明な選択であったといえる。

二・五万の一地形図　剱岳、大岩、小見、二〇万の一図幅　高山が今回のルートをカバーしている。

積雪地形　ここは名にしおう豪雪地帯である。いったん天気が下り坂になると、何日間にもわたって、激しく吹雪き、多量の降雪をみる。深い積雪が植生を隠し、地形を変えてしまう。傾斜が緩やかになってスキーが使いやすくなったり、雪洞が掘りやすくなるなど、メリットも多い。

今回、GPS（Garmin社製）を使って、現在地の把握、行動軌跡の記録を行った。予定した通過ポイントとルートをあらかじめ読み込ませておくと、現在地をリアルタイムで確認することができる。

雪見平で主稜線に出てから、忠実に尾根をたどったにもかかわらず、軌跡が予定ポイント、予定ルートからずれたことが何箇所もあった。前大日岳、早乙女岳、大日岳の山頂付近である。地表面の形、地形を表した地形図と積雪表面の形状にずれが生ずるのである。積雪が卓越風（注1）の風下側斜面に吹き溜まり、雪庇を形成することはよく知られている。例えばMunter（1）、なだれ事故防止研究会（2）、新田（3）など雪崩の危険との関連で雪庇を説くものは多い。大畑（4）は積雪の空間スケールを超、大、中、小、極小規模に分けて考察することを紹介している。五百沢（5）は積雪が山頂付近の表面の形をひずませる現象、積雪地形の形成ともいうべき現象に注目して、早くに魚沼駒ケ岳の実例を詳しく解析した。風上側斜面では卓越風に直交する稜線の近傍で積雪深が急減する。風下側斜面では風が稜線を超えたところに雪が吹き溜まり、著しい積雪深を記録する。積雪深分布は地形の凹凸を緩和したり、強調する効果を示す。

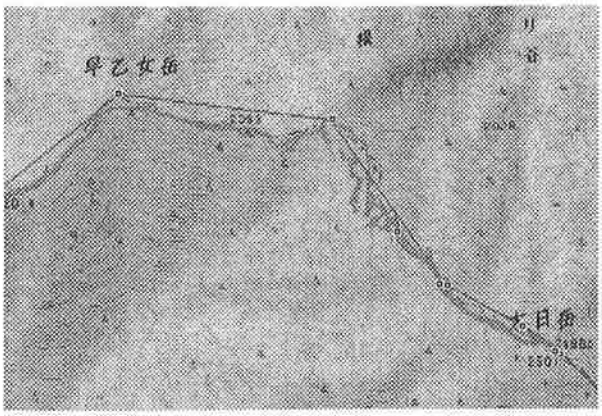
前大日岳、早乙女岳、大日岳で認められた地形と積雪表面の形状の食い違いは著しかった（図1、写真参照）。積雪深分布はもとの地形、降雪量、降雪時およびその後の気象条件によって決まるという。大日岳付近で見られる積雪地形形成の規模の大きさは地山の位置と吹き溜まりの関係という見方で理解できる現象の規模をはるかに超えている。

二〇〇〇年事故の調査委員会（6）はこの年の気象条件が前半寡雪、後半多雪という特異なものであったことを指摘している。季節前半の積雪表面にできたしもざらめ（注2）層の上に後半に降った大量の雪が載っかった。結果として深い層に弱層が形成された。この層を滑り面として上部の積雪層が崩落したとしたうえで（2、6）、事故原因となった「雪庇」の崩落を片持ち梁理論で解いた。

今回山頂で見た積雪による表面形状の形成は、これまで我々が知っていた降雪による雪庇や吹き溜まりの形成という見方で解くものより、はるかに規模の大きい現象として理解しなければならないもののように思えてならない。

遭難事故の責任　法律論として、事故の刑事責任は現場にいた者に対し、事故の予見可能性と危険回避義務を課すという形をとっている。

文部省（当時）が第三者によって設置した事故調査委員会はこの年の気象条件、積雪状態、表面形状などを精査した上で、「今回の崩落は、（中略）二つの事象が重なったため



早乙女岳から大日岳へのルートとトラック。ルートはナビゲーションのための目標を、トラックは実際に歩いた軌跡を示す。早乙女岳頂上付近でトラックが南側にずれていることに注意。

早乙女岳を背景に前列右側、田中昌二郎リーダー。早乙女岳稜線上のトレースは積雪表面地形のトレース。地山地形の稜線の南側にずれている（図１参照）。

に発生した特異なもので、（中略）仮に登山家が当時一般に入手できる情報等をもってしても、予見することはできなかった。（中略）今回の特異な雪庇崩落には、これまでの知識や経験が通用しなかった」と結論した。この結論を得て、現場の責任は問えないから、文登研、つまり国には法的責任はないと文科省は主張する。

しかし山本一夫は大日岳遭難事故経過報告がなされた席で、特に発言を求めた。「原因、理由が何であれ、山で遭難事故を起こしたことは登山家として恥ずべきであり、自分のミスであると考える。遺族の無念を思うと、言うべき言葉がない。伏してお詫び申し上げる。」と真情を吐露した。

ご遺族はその真意を深く理解し、事故発生以来の山本らの尽力を深謝するという言葉で応えた。

我々、登山家はそしておそらくは地形学、雪氷学、気象学の研究者たちも豪雪地帯での大規模な積雪地形の形成についてほとんど何も知らない、知らなさ過ぎるということを、今回の山行は明らかにした。

事故直後、講師たちが身の危険を顧みずに行った大日岳頂上の積雪断面の測定結果は、学界、登山界に衝撃的な新知見をもたらした。学界に対する重要な貢献であったといえる。

文部科学省登山研修所はわが国の登山界、スポーツ文化の向上発展に貢献してきた。今後も大きい影響を及ぼすであろう。法律論、責任論に汲々することなく、この事故からより多くを学び、教訓として次代の若者に引き継ぐため一層の努力を傾注しなければなるまい。

引用文献

(1) Werner Munter: Lawinen, pp.223, Verlag Pohl & Schellhammer, 2003.
(2) 北海道なだれ事故防止研究会編：決定版雪崩学、三四九頁、山と渓谷社、二〇〇二.
(3) 新田隆三、雪崩の世界から、二三〇頁、古今書院、一九九五.
(4) 大畑哲夫、積雪と積雪現象、前野紀一・福田正己編：降雪現象と積雪現象、基礎雪氷学講座、二七二頁、古今書院、平七.
(5) 五百沢智也、登山者のための地形読本、四三四頁、山と渓谷社、昭四九.
(6) 北アルプス大日岳遭難事故調査報告書、同委員会、七八頁、平一三.

注1　ある期間に吹く風の最も頻度の高いもの。日本では冬、北西風が卓越する。

注2　積雪層の表面または内部にできる霜の結晶。積雪弱層となり雪崩の滑り面となる。

西蔵旅游消息

笹谷　哲也

河口慧梅、能海寛といった明治の僧侶たち、また今次大戦と前後した西川一三、木村肥佐生らのチベット潜入の伝記、紀行文を読むたびに、西蔵高原を中心としたチベット文化圏の地理、気象、風俗を知らないため、臨場感が全く出てこず、何かエライ所を何カ月もか

けて、苦労して歩きまわるというだけの感じしか持てなかった。この二、三年やっと時間ができたので、この先達たちが、どんな所で苦労されたかを、今さら、歩くことは無理なので、汽車、自動車、飛行機をつかって見て廻ろうと発心し、西蔵文化圏の旅行を始めたわけです。

初めに、西川一三の出発した内蒙古のフフホトから汽車で包頭、オルドス砂漠北、黄河の湾曲点をとおり、寧夏の銀川、中衛をへて蘭州、青海省の西寧青海湖までいきました。この時は西夏の遺跡を見物したり、中衛では豚袋の筏（昔からあるらしい）で黄河を横切ったり、蘭州では飛燕馬（中国の国宝中の最高傑作といわれる馬の彫刻）も見られたし、楽しい汽車旅行でした。おまけに青海湖の岸で車が砂地に車輪をとられ、八月といっても3千mの湖畔は寒く夜半に救出されるまで震えていたことも思い出します。このあと、内蒙古のアラシャン旗から額済納旗の居延海（中島敦の李陵が駐屯したところ）や天山横断の旅をして、チベット圏にもどったのは、西寧から四川省成都への旅行です。黄帽派の名刹ラプラン寺にお参りし、若尓蓋の大湿原をへて川去寺、九塞溝、黄龍、松潘とまわりました。若尓蓋湿原では紅軍が井岡山から延安への長征の途中冬季にここで全軍の三分の一を疲労と凍死で失ったとか、その下の川去寺には、大きな紅軍兵士の記念像がたってます。

この道筋の人々は殆どがチベット族（蔵族）で昔の吐蕃国の東辺にあたると思います。この旅行で勉強したのは、泊まる各地の招待所（はっきりいうと安旅籠で、厠は外にあり、明かりはない、蒲団は重く、湿気ているし、毛布は解放軍の中古で、これ又、重くて眠れない）の諸々の不備に気付き、その後の準備に役立ったことで、寝袋は必携です。同じ夏に、青海省の海南、果洛蔵族自治州のアムネマチン周辺と黄河原流域の星宿海、札陵、鄂陵湖を周遊しました。四千m前後の高原をヤクを丘に遊牧するチベット人の天幕を見ながらの自動車旅行です。しかし天気が悪くアムネマチンは氷河の末端しか見えず残念でした。

この山も聖山であり熱心に山々を廻って巡礼する人々に出会いました。黄河源流域の二つの湖は、稀少種の黒頸鶴の飛来するところで、私共も運良く見ることが出来ました。景色は素晴らしいとしか云いようなく、湖の色が紺から藍に変化していくのもそれは綺麗なものです。瑪沁、瑪多という町に連泊しました。食事は朝夕は外食、主に四川省出身の主人が経営してますが、毎回あまり辛くするなと注意しないと、私共には喉もとおらないくらいの辛い料理を出します。主食は、朝は稀飯（粥）、包子（肉入り饅頭）茹玉子あとは、ご飯でしたがこの辺は圧力鍋が普及しているらしく美味しく炊けてました。二人、三人頭痛の人がでましたので、体温計はないかと尋ねたところ、病院、薬局には無く一本だけ持っている人を見付けて借りました。周囲を合わせると五千人以上の人口はある筈、体温計は一本だけとはどうしたことでしょうか。これ以後は、体温計は必ず持って旅行することにしています。巴顔客拉山口の峠（五千m、黄河と揚子江の分水嶺）に立ち、いつかここから南行し玉樹、昌都を抜けて雲南へ出たいと思いました。

果洛は、漢方薬の原料になる植物が豊富とかで、私の買った冬虫夏草はその朝、採ったもので、一本二十元（約三百円）でしたが、成都では五倍はするでしょう。これは万病に効く秘薬で、高血圧、腎虚、二日酔から水虫まで効くそうで、私は冬虫夏草に枸杞、朝鮮人参、甘草を足して紹興酒につけて数ヶ月経ったものを基に、鶏のスープをつくり、鮑、海参を入れて煮て酒の肴にしてますが、美味しい上によく効いているようです。

この年の秋には、カシュガルからタシュクルガンやジュンガル盆地、カラマイをへて、中国、モンゴル、カザフスタンの境界のハナス湖までいきアルタイをとおり哈密までもどりました。暑いのに白酒を飲み過ぎおかしくなりました。余談ですが、白酒には酒精度により二種類あり、美味しいのは、五十度以上の分です。ただし、やり過ぎますと腰から下が動かなくなるのはウォッカといった蒸留酒に共通の症状がでますので注意してください。

この年の暮れから南中国にはじまった非典型肺炎（SARS）のため、渡航自粛や禁止がでて、チベットへは七月中旬まで入域できませんでした。しかし、西蔵自治区では一人も非典の患者はでていないらしく、これは西方、印度におられる大活仏である法王が全蔵族の安全を祈り続けたから災厄をまぬがれたということです。この話は、本当はチベット

人のすべてが知っていますが外の人々に話すと当局ににらまれるので、なかなか話しません。チベットの人の手首には赤い紐を結んでおりますが、これは非典の為の特別のお祈りの時に、自治区の活仏が皆に分け与えたものです。だからチベットの人々は、もう非典にはかからないと楽観しています。

八月中旬に、また、西寧にもどり今度はゴルムトをへて、ラサへ入りました。旅の安全を祈り、タール寺へ四度目のお参りをして、ゾンカバ大師に賽銭を上げました。四度目ともなると、この黄帽派の開祖にも親しみをおぼえますし、西川一三がこのタール寺に長く滞在して今回の私共と同じ道筋へ出発したというのもなにか因縁を感じます。道は湟源をへて日月山を越え、青海湖畔へ出ます。最初に来たときは、泥の悪路で、三倍以上の時間がかかりました。

さて、今度も湟魚という湖魚を食べました。鱗がなく白身でカラ揚げにすると美味しいのですが今回のは乱獲のため小さい上に冷凍で味は良くありませんでした。昔は、全長一m以上が沢山とれたそうです。特に大躍進期の飢饉のときは、湖周辺の人々はこの魚で飢えをしのいだそうです。湖畔に、近くの僧院から来たらしい小坊主が二〇人くらいで水に入って遊んでおり、携帯電話を持って、家の親と話しているのを見ると、なんとも奇妙な光景でした。茶卡塩湖の国営製塩工場の招待所に一日目は泊まりました。巨大な塩湖で、清朝では国の塩の半分はこの塩湖でまかなっていたそうです。ゴムルトまでは高速道路のような良い道で左右に砂丘や蜃気楼を見ながら新興都市ゴルムトに着きますと、立派な五、六階のホテルが沢山できております。さすが、西蔵自治区、甘粛省の敦煌、哈密、ウルムチに通じ、チャンタン可可西里の資源開発を押さえる要の地だけあって人口も、もうすぐ五〇万人を超えるそうです。ここの人は流れ者が多く、性質が悪いので用心がいるとは聞いていましたが、私共の車も、水入りのガソリンを注入され、後々までエンジンの調子が悪くて困りました。市場には、新疆の瓜をはじめとしたオアシスの果物、甘粛の野菜、海南島の熱帯果物、無いものを探すのが難しいくらい豊富でした。前途のために、色々買い込んでいよいよ昆崙へ向かって出発です。ゴルムトのホテルでは、ホップの代わりに苦瓜を使った地ビールを飲みましたが、仲々の味でした。

昆崙山口から、鉄道がでてきました。この辺は立派に完成し、試運転らしい列車も通ってます。昆崙山口にかかるころから、快晴なのに気温が下がってきて外気温が零度近くになりました。高度は四千m、沱沱河のほとりのトラック運転手達の溜まり場で夕食、雨がみぞれ、そして吹雪になり寒気はセーターをつきとおして入ってきます。その夜の招待所は、厠の臭いが充満し、寒いし汚いし、魔法瓶一本の湯で震えながら過ごしましたが、翌朝は快晴、沱沱河畔の日の出は、周りの山が冠雪して白くなっているのと合わせ、荘厳なものです。ほとんど、揚子江の源流に近いところで、荒れると厳しい気候になり、西川一三もこの辺から唐古拉山口のあたりまでで、苦労してます。私共は暖房付の車でも文句を言っているのです。唐古拉山口のあたりは、工事のため渋滞ばかりではかどりません。那曲へ着きホテルへ入ると、これまた立派で信州の駅前に沢山あるビジネスホテルより外観は上等ですが水回りが悪い上に寒いので意気が上がりません。ここから五一〇〇mの峠を越える納木錯は西蔵高原で二番目に大きい塩湖で、チベット人からは聖湖と崇められてます。強風に数万の色とりどりのカタ（皆の寄進した布）がひるがえりその下を数珠を持って廻る沢山の巡礼がいます。ともかく寒い湖畔でした。

夕刻、ラサへ着き、夕暮れのポタラ宮を拝んで西蔵飯店に入りました。ここまで来ると、西洋人の団体も多く部屋も日本の都市ホテルと変わりませんが、食事は今までの招待所と大して違わずあまり美味しくありません。ヤクバーガーというハンバーグとヤクステーキというのをメニューで見付け注文しましたがヤクの干し肉を煮込んでパンに挟んだ様なもので、妙な味がしますし、ステーキのほうも薄い肉が数枚、やはり煮てあり、慣れないスパイスの味でダメでした。どうやら、私共がこの料理を最初で最後に注文した客らしいと思います。

さて、先達たちの行跡をしのんで、ポタラ宮、大昭寺、デブン寺、セラ寺、郊外のカムデン寺へ参詣し、前途の旅の安全無事をお祈りしました。気付くのは、ポタラ宮、大昭寺を除くと、全ての寺がごく最近徹底的に破壊

されてることです。この五〇年に起きた併合、文革の度にやられたものと思います。そのやり方も、ダイナマイトを使った破壊らしいです。最近は、政策の変更で新しい仏像も、政府から寄進されたり、建築の復元に援助をだしているそうですが、チベットの人々には、新しい仏像や建築よりも、生きている法王への帰依の方が強く、彼らの信仰のしたたかさには感動すら覚えます。

ラサから川蔵公路（南路）をとって、八松錯という湖に向かいました。バ・ラという四九〇〇ｍの峠をへて、林芝地区へ入りますが、この峠の前後は高山植物の咲く高原で美しい景観を楽しめます。道は完全舗装、工布江達の先、五〇キロ位で北へ入る道をたどると湖につきます。白雪の山々に囲まれた湖で幽玄の趣のある景色ですが、招待所は寒いし、厠は野外でたれ流し、室内に手洗いは付いているがすべて使用不能、厠の習慣がない人が便所を管理しても出来ないということでしょう。

湖から公路を出て東チベットの中心地で軍の大駐屯地である八一鎮につく。「八一」とは解放軍の記念日です。ここの野菜市場で松茸を見付けました。いい香りがする新鮮なもので、大型二十本で、九十元（約千三百円）です。早速、買い込み、翌日、林芝で買った生乾きの松茸と共に、家まで持ち帰りましたが、生乾きは、すぐにカビが出たが丸のままの方は、無事にスキヤキになりました。次は、日本から肉と醤油を持ってきて、豆腐、ネギはこちらにあるので二、三日滞在してスキヤキをやるつもりです。

林芝の道路工事のため、セチ・ラへは通行止め、あと二カ月は通れないので、ラサへ戻り、成都へ出ました。成都のホリデイインにある日本料理屋に、松茸の天ぷらがありました。大型四本で二百元（約三千円）、なかなかの味でした。この旅ではセチ・ラが通行止めで、ナムチャバルワも見られずでしたので、又、十一月に東から川蔵公路をとおることにして、昆明、中甸、得栄、郷城、稲城、理塘、巴塘、芒康、八宿、邦達、然鳥、波密、通麦、魯南からセチ・ラをとおり、念願のナムチャバルワを拝みました。途中で郷城から仙熱日（五八〇三一ｍ）を見るため亜丁まで入りましたが、夕日に映える仙熱日の独立峯は、それは巍然とした姿でした。郷城、稲城から理塘への道は公路ではないためか通行する車も少なく、野生の小動物や鳥が多いところで私共の車も、前を横切る野鳥の群に突っ込んで一羽を轢いて捕え、その晩のスープにしましたが、赤脚鳥という綺麗な色の羽をした鳥でした。この運転手は、敬虔な仏教徒でしたがどうなっているのでしょうか。チベット人の運転手は高い山や峠に着くと必ず声に出して山の神への感謝を表しますが鳥を轢き殺して食べるという行いとは矛盾していると思います。

理塘は、海抜四八〇〇ｍ、騎馬競争で有名ですが、また、チベット東部のカムパ族の中心地でもあります。カムパは勇猛果敢、情に厚く、そして格好良く男前、別嬪ぞろいという説もあれば、凶暴、無謀、商売がうまく、人殺し、泥棒は日常茶飯事と反対の話しも沢山あります。今の法王が印度へ逃れたときの護衛もカムパ、昌都を中心にしてゲリラ戦で中国軍に抵抗し、王震将軍を激怒させたのもカムパ、だから理塘の僧院は破壊のされ方は凄惨なものです。少しづつ修復されているようですが、カムパの漢人嫌いはこれからも長く続くでしょう。

巴塘を過ぎると金沙江の橋にでます。この辺で、能海寛、寺本婉雅の二人は、ラマ僧兵の妨害で入蔵できなかったのだと、往時の二人の悔しさ無念を思いました。

芒康からはメコンの上流へ下り左貢へでてサルウィン川を渡り、四，五千ｍの峠を上がったり下がったりしながらの道です。道は、おおむね良いのですが、やはり工事が多く待ち時間も長くなります。峠の上り下りの九十九折の道も見事なものです。邦達で昌都へ行く道と分かれ、八宿をへて然鳥につきました。

この先の拉古村にＡＡＣＫの老雄平井ポコさん率いる神戸大学隊がいるはずなので、早朝から拉古村を目指して出発しました。村へ入るといま出発しようとしている車を見付けポコさんを探すと、白鬚のポコさんがいました。早速に成否を尋ねると、残念との答え、しかし、先輩が元気なのを見て安心しました。この村は拉古氷河のすぐ下にあり、氷河期や周辺の雪山に囲まれた風光明媚なところですが、村の人口は五百七十人とか、牧畜と青梗麦だけで生活は楽ではないと想像しました。村の若い男から漢方の野生天麻を二百元で買いました。これも新陳代謝を促進するとかで、高価な薬です。ちなみに、この一片を入れたスープが波密の食堂で百四十元です。普通の

料理一皿が十元程ですから、どんな高貴薬かと思いますが、まだ試してません。

然鳥から波密は、道路工事中というので夜明け前の寒い中を出ました。路傍で冷たい饅頭をかじり昼前に波密へ入りました。ここは、上高地の風景にそっくりで、雪山清流と上高地が懐かしくなりました。まあまあの宿も確保でき、外の食堂の味も然鳥よりずっと良く久しぶりに、白酒を空けました。すこし先の支流を北へ入りましたら、やたら警官の多い村が見えます。窓の少ない建物があると思って聞くと、そこがチベットでも一番の政治犯の刑務所とか、さぞいつも満員でしょう。通麦には、川蔵公路開通の時の殉難軍人の碑がありましたが、本当に大変な難工事だったと思います。今でも雨期には崩れて不通になります。通麦を過ぎると、ヤルツァンボの大屈曲点が少しでも見えるかと思っていたのですが、途中の排龍から二日ほど入らないと真の屈曲点は見えないし、今はこの地域の奥への旅は禁止されているそうです。魯郎へ入ると、ギャラペリ峯（七一五〇ｍ）が見えだし、セチ・ラ峠につくとナムチャバルワ（七七八二ｍ）が良く見えました。波密、通麦、魯郎からセチ・ラまでは、雪山、森林、清流ありと、時間が許せばゆっくりしたい所です。セチ・ラを下り、林芝へつきました。二カ月前に不通で追い返された地点へ反対から十日間かけて来たわけです。林芝からは、前の公路を通らずにヤルツァンボの本流に沿って、米林、郎県、沢当、そしてラサへ出ました。米林では、なんと飛行場を建設中で、西の阿里と共に二，三年すると観光客にも開放すると聞きました。ここは、ラサの空港より約千ｍ低いので高山病にかかる人も少ないと思いますが、ここに空港が出来ると、成都から観光バスで四日間で来られるし、見物して帰りは空路ということになります。ヤルツァンボ本流は風が吹き抜けるらしく、両岸は砂丘になっている所も多く、道路も砂に埋もれたところがあります。さすがに古くから開けた地方なので、沢当の近くのサムイェ寺、昌珠寺、ユング・ラカン等の名刹や蔵王墓等、沢山の観光名所があります。道も沢当からラサまでは高速道路です。この地方はブータンにも数十キロと近くで、昔から交易も行われていた地方です。

今回は、ラサホテルに泊まりました。西洋人が多いので、朝食は、洋式の注文もできますが、中国料理は中途半端で美味しくありません。私共は近くのうどん屋で四川麺を食べました。チベットでの食事は、炒め物が中心で、豚肉、鶏肉、ヤク、牛肉もあるのですが、炒める油が多すぎるのと、何度も使ってタール状の黒い油を使うので、普通の量を食べていると必ず下痢します。その上に、激辛です。私は登山に来たのではないので量はいつもの半分にして、それでも毎食後、消化剤を飲んでいます。チベットには、美味しいものは皆無と考えてください。餃子によく似たモモというのもありますが、皮に使う粉が青梗か雑穀で、中国の餃子の方がずっと美味しいです。麺もありますが、いつも茹ですぎの上に、油が多すぎます。自炊する方が良い食事ができると思います。

ついでに私の常用薬は、毎日ビタミンＢとＣを一錠づつ、食後に消化薬、就寝時にアスピリン二錠を服用してます。いままで高山病の症状は出ておりません。

この旅行で東チベットの様子も少しは分かった気になりましたので、この六月には、カトマンズから入り、カイラス巡礼をしてタクラマカンへ出る予定です。この時は、チャンタン高原の一部も通るので楽しみです。この旅行の準備のため、今年三月からネパール、西蔵自治区、雲南へ行きました。飛行機の都合でラサに二泊しかしませんでしたのでヤクドク湖（四八〇〇ｍ）だけ行きました。二〇〇三年の八月から数えると三回のチベットになります。もう二，三回で終わりにしようと思っています。

また、インドのチュンビー渓谷へ下りるヤートンまでは、既に中国の観光客には許可が出ていますので、外人にもＯＫが年内に出るはずです。この道を通ってガントク、カリンポン、ダージリンへのルートは、西川一三、木村肥佐生がヤミをしたり英国のスパイをやった時に使った道です。そして念願の青海省から玉樹、徳格、昌都へ出て川蔵北路を丁青、巴青、那曲、ラサへたどる旅を最後にします。そしてまた、先達の伝記、紀行をひもといて再読する時は、私の目で見た現在のチベットと対比して、楽しく時を過ごせると思っております。

今まで紹介した旅行には、いつもＡＡＣＫの諸兄の同行があります。また、旅をとおし

て、青海の喬海生、新彊のバートル、雲南の郭建華、アラシャン左旗の蘇力徳の諸兄とは兄弟のように親密になり、いつも消息を交換しております。一度この四君と共に祁連山の青海省側、門源で天幕をはって思いっきり飲み明かそうと約束しています。

アンナプルナとマオイスト

阪本　公一

テイルマン著「ネパール・ヒマラヤ」と今西錦司さんの「ヒマラヤを語る」は、私達の青春時代にはヒマラヤ登山へのバイブル的書物であった。一九五〇年にテイルマンがアンナプルナ四峰七五二五ｍをめざしたが、七三〇〇ｍ地点で断念。その記録をもとに、マナスル偵察隊の今西錦司さん達が一九五二年にテイルマンと同じサブジイチューからアンナプルナ四峰を五八〇〇ｍ迄試登した。翌年の一九五三年秋に、ＡＡＣＫが初めてのヒマラヤ登山として、アンナプルナ二峰七九三九ｍを南面から登ろうと遠征隊を出すが、二峰の南面は険峻な岩壁と氷壁にガードされ可能な登路が見いだせず、急遽北面に転身。前年今西錦司さん達が偵察したアンナプルナ四峰七五二五ｍの攻撃を始めるが、時既に遅く頂上を目前にした七一〇〇ｍで冬の悪天に遭遇し、今西壽雄隊長と藤平正夫さんは最終テントも烈風で破られ、痛恨の撤退を余儀なくされた。私達が京大山岳部の現役時代に、アンナプルナ遠征隊の隊員であった脇坂誠ザッカス先輩から笹ヶ峰ヒュッテで何度も聞かされた懐かしい話である。数年前にアンナプルナ内院からカリガンダキを歩いた時に、アンナプルナ連山の南面は十分眺めてきたが、アンナプルナ北面は私にとって未知の憧れの山域であった。

一九五三年のＡＡＣＫアンナプルナ遠征からちょうど五〇周年。この区切りのいい記念すべき年に、諸先輩達が足跡を残したアンナプルナ四峰を、自分のこの目で是非眺めたいとトレッキングを計画した。マルシャンデイ川からアンナプルナ二峰や四峰を眺めた後、五四一五ｍのトロンパスを越えてムクチナートに行き、カリガンダキからタトパニ、ゴラパニを経てポカラに行くアンナプルナ一周トレッキング。この長大なトレッキング・ルートを歩けるのは、六三歳の私にとって最後のチャンスになるかも知れない。そんな思いで慎重に計画を練った。同行願った仲間は、京都山岳会の宮川清明さん（六二）、宮川ふみ江さん（六五）、朝倉英子さん（六八）、そしてＡＡＣＫの高野昭吾さん（六九）と私の五名。全員が日本山岳会京都支部に所属しており、お互い気心もよく知った間柄。でも、平均六五・四歳の高齢パーティなので、一日の行動時間を通常より短いものとし、且つ何日かの休養日を適宜設けて二六日間の余裕あるトレッキング計画とした。更に、ポカラとカトマンズで二日づつの予備日乃至観光日を設け、二〇〇三年十月十日関空出発、十一月十一日帰国のゆとりあるスケジュールで出かけた。

乗り合いバスでカトマンズを朝七時一五分に出発し、午後三時前にベシサール着。五一年前の今西錦司さん達は、ベシサールから歩いて二時間ほど先のクデイ迄、カトマンズから丸六日かけて歩いたと言う。ベシサールは、食料品店、衣料品店、雑貨屋、金物屋から電気製品店まであるマルシャンデイ川沿いの最大の町で、最奥の村マナン等からの買い物にやって来る人達で街並みはなかなか賑やか。テイルマンは「茶やチャパティを買って旅の倦怠を紛らわすような道端の店がなかった」と書いているが、今や、マルシャンデイ川沿いの村々には電気も通じており（停電は多いようだが）、一時間おきぐらいにバッテイやロッジが建ち並ぶ大街道である。マオイストの影響か、やたらと警察や軍隊のチェック・ポストが沢山あった。ベシサールから三日目に、チベット風の民家が現れるバーカルチャップ。いよいよインナーヒマラヤに入った事を実感する。バーカルチャップの先からアンナプルナ二峰の東壁が威圧的な姿で天空をついて聳える。チャメを過ぎるとリンゴ園も現れ、バッテイの前でリンゴを売っている。一個五ルピー（約一〇円）でリンゴを買い求めた。味はマアマア。ピサンに近づく頃から白樺の木が現れ始め、マルシャンデイ川も開けた高原状となる。壮大な大スラブ壁を過ぎて暫く行くと、ピサン下村。ピサン上村から、マルシャンデイ川の対岸に圧倒的な落差でなぎ落ちるアンナプルナ二峰の北壁が、そして東方にマナスル三山が望まれた。

今回のトレッキングに際し、今西錦司さん

1952年のマナスル偵察隊の今西錦司さんや、1953年のアンナプルナ遠征隊が幕営したサブジイチューのエメラルド色の池と松林の疎林
（左はアンナプルナ4峰、右はアンナプルナ3峰への稜線）

グンサンの少し上流より眺めるアンナプルナ連山
（左よりアンナプルナ2峰、アンナプルナ4峰、アンナプルナ3峰）

の「ヒマラヤを語る」を何度も読みなおしたが、今西錦司さんの観察力は実に鋭く、又情景描写も大変正確であり、感服させられた。

「ピサンのさきに、ちょとした峠があって、それを越えると、又平坦な、高原状のところがずっとおくまでつづいている。いちばん奥に、カリ・ガンダキとの分水嶺の山が見えてきた。山すそにバッドランド地形が現れて、景色は一段と荒さを増した。」

峠とは三二八五ｍの峠で、その向こうに見える高原状の盆地は現在フムデと呼ばれており、飛行場が出来ていて、春秋のシーズンには週二便の飛行機がポカラから往復している。カリガンダキとの分水嶺の山とは、薬師義美さんが一九六五年に試登され、一九七九年に第二登されたテイリツオ・ピーク七一三四ｍの事である（一九六五年にはＡＡＣＫの金山清一アンニャさんも参加されている）。

「昼まえになに気なく、アンナプルナ側からでている谷を一つ渡った。少し行くと、田口と高木が望遠鏡を出して、その奥の谷を見ている。なにを熱心に見ているのか。アルパイン・ジャーナルの写真で見覚えのあるアンナプルナ第四の頂上が、そこから見えているのだ。それは同時に、我々がベース・キャンプを張るべき場所に到着したことを、知らすものであった。ベース・キャンプは、ただちに、松林の疎林のあいだに張られた。かたわらに、エメラルド色をした池があって、きれいな水がこんこんと湧きだしていた。一〇月五日、カトマンズを出発してから二二日目である。」

今西錦司さん達が設営したアンナプルナ四峰ＢＣは、フムデ飛行場から三〇分ほど歩いて、サブジイ川の小橋を渡った上の広い台地の松林の中にあった。一軒の小さなバッティが道路沿いに建っている。バッティから東の方へ、一人で歩いていく。三〇〇ｍほど行くと、松林の疎林の中にエメラルド色の美しい池が現れ、その奥のサブジイチューを挟んで、右にアンナプルナ三峰七五五五ｍ、左にアンナプルナ四峰七五二五ｍが眺められる素晴らしい場所だ。テイルマンも一九五三年のアンナプルナ遠征隊も、この地にＢＣを設営したのであろう。大先輩達の昔のＢＣ跡に立ち、感無量の感激に浸った。私達がたったの七日で来たとこを、今西錦司さん達は二二日もかかったという。当時の苦労が偲ばれる。

「ベース・キャンプの横に流れる谷を、われわれはチンディと聞いていたが、テイルマンにしたがってサブディと呼ぶことにする。ほとんどまっすぐの谷で、そのつきあたりに、アンナプルナ第三峰とアンナプルナ第四峰の間の最低鞍部・・五五〇〇ｍメートルぐらい・・が見える。望遠鏡でみると、その鞍部につづくクロアールにかかった、小さな氷河の末端が、たちきられて、ひどくオーバーハングしている。谷は大部分森林に覆われて。なごやかであるが、山はどうも険悪らしい。ちょっと暗い気持ちになった。」

テイルマンや今西錦司さん達が登られた時から五〇年余経過しており、氷河が随分後退

してしまったのか、鞍部にかかるクロアールは実に悪く簡単にはとりつけないように見えた。

何度も何度も、アンナプルナ四峰の方を振り返りながら、マナン部落に着いた。一九五三年のマナスル隊の学術班としてマナンを訪れた川喜多二郎さんは、油断も隙もないチベット人の村として、その著「ネパール王国探検記」でマナンを紹介されているが、今のマナンは沢山のロッジが建ち並びアンナプルナ一周トレッキングの最大の中心的村として、欧米人が毎日大勢出入りする明るい村である。マナンで一週間分の疲れを落とす休養日をとった後、十月二一日より三日間かけて高度順応を兼ねてテイリツオ東峠五千m迄のハイキングに出かけた。アンナプルナ一峰の初登頂をしたモーリス・エルゾークがアンナプルナ一峰攻撃の前に、カリガンダキよりテイリツオ西峠に登り、テイリツオ湖を渡って東峠に至りマナン迄おりる偵察行を行っている。アンナプルナ一峰がテイリツオ湖の上のグランド・バリエールに存在しないことを確認してから、ミリステイ・コーラからの本格的な攻撃を始めた事が、「処女峰アンナプルナ」に詳しく書かれている。カンサール村からテイリツオ東峠へは、息を飲むような素晴らしい景観の連続であった。エルゾークがグランド・バリエールと名付けた数キロにわたる氷の大障壁、ロック・ノアール七四八五mがその真ん中にどっしりと構え、西端をテイリツオ・ピーク七一三四mが締めくくっている。又、四二〇〇m近辺から東の方を振り返ると、マナスル三山、ピサン・ピーク、そして北方の山々の一大パノラマが楽しめた。五千mのテイリツオ東峠に着くと、その下にエメラルド色の大きなテイリツオ湖が輝いており、感嘆の声を上げる。こんな美しい景色を眺めながら、テイリツオ・ピークを登られた薬師義美さん達はさぞ、楽しかったことであろう。テイリツオ東峠へのベース・キャンプとして四千mの谷間で日本から持参したテントで幕営したが、そこには大きなロッジ建っておりびっくりさせられた。

テイリツオからマナンには降りずに、直接三八九〇mのグンサンへ行き、一日休養。グンサンからもアンナプルナ二峰、四峰、三峰、ガンガプルナが手に取るように望めた。四四五〇mのトロンペデイには大きなロッジが三軒もあった。早朝三時半にヘッドランプをつけてトロンペデイを出発。ロッジからはザラ場の急登だが、月明かりもない闇の中を足を動かしてただ歩くのみ。気温はマイナス六-七度なので、汗はかかずに歩けて有り難い。ポーターの一人のプルマが遅れだす。どうも高度障害が出てきたようだ。ガイドのジット君と他の二人のポーターでプルマの荷物をダブル・ボッカして登るという。私達五人は割と快調にトロンパス五四一五mに八時に到着。峠のバッテイでミルクテイーを飲んでポーター達を待ったが、風もきつくマイナス一五度に温度が下がってきたので、下のバッテイで待っている旨のメモを残し、ムクチナートに下山を開始した。チャブルのバッテイでラーメンを食べて一服。ちょうど一時間遅れでガイドとポーター三人が降りてきて合流。大事なくホットする。その晩はラニポクのロッジに泊まったが、昨日までの快晴が嘘のように雨が降り、翌日の朝には四千m以上は積雪で真っ白になっていた。カトマンズを出て以来、丸二週間ずっと快晴続きであったが、私達がトロンパス越えてから、天候が悪化したとは本当にラッキーであった。ラニポクをでて暫くすると小雨も止んだ。振り返ると、ジャルコットの城塞のような古い街が、紅葉の高原に浮かんでいる。晴れていればカクベニのすぐ上の平らな広い丘から真正面に見えるはずのダウラギリ主峰は、今日はガスで全く見えず。一昨年秋ダウラギリに登りに行った宮川清明さんは、期待していたダウラギリが見えずがっくり。カクベニでは、三年前にお世話になったニュー・エシア・ホテルに投宿。御主人のペマさん、奥さんのニマさんと再会を喜びあった。長男も、長女も現在は東京で住んでいるとの事。以前と同じように、掃除が行き届いた清潔なロッジに二日間滞在した。カクベニで休養をとった後、ジョムソンの博物館をみて、マルファ泊まり。五〇年前にマルファを訪れた川喜田二郎さんは、「売春婦の街」とその著でマルファを紹介されているが、今はそんな気振もない白壁のきれいな街道町である。ツクチェの手前から、ツクチェ・ピーク六九二〇m、そして一九六〇年にスイス隊（マックス・アイゼリン隊長）が初登頂し一九七〇年に同志社大学隊（太田徳風隊長）が第二登を成し遂げたダウラギリ八一六七mの北東稜が紺碧の空に聳えてい

た。マルファからツクチェ迄わずか二時間の行程だが、その日はツクチェ見物とした。スニル・ゲストハウスのプラサドさんは相変わらず元気だったが、この二年間で更にトレッキング客が減ってツクチェ村は一層寂れてしまったと嘆くことしきり。チベット交易が盛んだった時代はタカリー族の中心地として三千人ほどの人口だったツクチェは、今や人口たった七〇〇人の由。チベット交易もすたれ、マオイストの影響でトレッキング客も減り、更にツクチェを飛び越えてジョムソン迄飛行機で行くムクチナート巡礼者やトレッカーが増えて、ツクチェは見捨てられた村になり、空屋だらけになってしまったとの事。河口慧海の泊まっていた部屋を再度見せていただきたいとカルパナ・セルチャン夫人を訪ねる予定をしていたが、セルチャン夫人も息子さんの住んでいるロンドンへ既に引っ越してしまったらしい。ツクチェの街自身は、以前よりは掃除が行き届いて清潔になっていたが、何だか閑散とした寂しい状況であった。

タトパニの野天風呂で汗を流し、ゴラパニ経由ポカラに向かう。ゴラパニ近辺でマオイストに遭遇し、一人二千ルピー（約四千円）をとられたと言う話を、行き交うトレッカーからしきりに耳にした。タトパニ一一六〇mからゴラパニ二八六〇m迄は、標高差一七〇〇mの急な登り。我々年寄りには一日で登るのはかなりきついので、一日半の行程としチトレ二三五〇mで一泊した。チトレからは、ダウラギリ主峰南壁が眼前に望まれ素晴らしい景観だった。翌日早朝にチトレを出発し、九時一五分にゴラパニ着。ロッジにチェック・インする際に前庭で人だかりがしているのを目にしたが、後でガイドから「五人のマオイストが、ヨーロッパ人の団体からお金を集金していました。」と聞かされた。天気がよいので、荷物を整理した後、プーンヒル迄登りダウラギリやアンナプルナ連山を眺めに出かけた。プーンヒルからの眺望も素晴らしかったが、マオイスト出没の影響か、トレッカーは数人しか来ていなかった。「マオイストは、もう集金に来ない？」との私の質問に、「いいえ、彼らは各ロッジで宿泊客名簿をチェックしていますから、夕方には必ずやってきますよ。」とガイドのジット君。彼の言うとおり、ダルバードがテーブルに出され、さあ夕食という時にマオイストの若者がとうとうやってきた。若者は、銃もナイフも出さずに、ポケットから手書きの英文の書類を取り出して、静かに私に提示してきた。「私達が、現在アンナプルナ地域を統治しています。現国王及びその政府が発行している国立公園入園許可書は無効なので、私達に対し一人あたり二千ルピーを支払って許可を取っていただきたい。一度支払えば他の地域で再度請求されないように、私達の領収書を発行します。」との趣旨の一枚の英文書であった。マオイストの若者達は、武器で脅すこともなく割と冷静に紳士的な態度で協力を要請してくるとの情報を得ていたので、英語を喋れるリーダーを呼んで貰って、ガイドのジット君のネパール語の補足通訳もまじえながら、約三〇分ほど話あった。「私達は、美しいヒヤラマの山々をいただいたネパールが大好きであり、又誠実で親切なネパールの人々を敬愛しています。あなた達がネパールの自由の為に戦っておられる事、特に貧しいネパール人一般大衆を支援しようと努力されている事を、私達は十分理解しております。たいした事は出来ませんが、私達の小さな財布から心ばかりの寄付をする用意はあります。しかし、私達は金持ちではなく、既に定年退職して政府から貰うわずかの年金で生活している無職の日本人年寄りグループです。素晴らしいネパールの山々を今回も歩きたいと、計画以来一年間かかって少ない年金からようやくお金を貯め、且つ不足する分は息子や娘からサポートして貰って、ネパールにやってきました。これからポカラに戻り、更にカトマンズにでて、可能なればゴザインクンドの方へも歩いてから日本に帰りたいと思っております。私達の貧しい財政から今二千ルピーも各自が支払う事は、大変大きな負担です。来年も、この美しい国ネパールにやってきて、素晴らしいネパールの人達との友好を深めたいと思っています。私達はあなた達の立場を十分理解していますが、どうか私達の事も御理解願い、ネパール好きの私達を失望させ将来の夢をも奪うような事はしないでください。よろしくお願いします。」と冷静・且つ丁重に私達の意見を述べた。その結果、マオイストのリーダーは、即刻半額の一人一千ルピー（約二千円）にすると譲歩してくれましたが、私達の方から五人分で三千ルピーにしてもらえないか再度検討して欲しいとお願いしました。リーダ

ーは少し思案していましたが、中をとって五人で四千ルピーにしようと提案してきましたので、こちらも気持ちよく一人あたり八〇〇ルピー（約一六〇〇円）五人で四千ルピーで合意しました。交渉成立の握手をした後、領収書が発行されました。年内は有効だが、来年は再度支払う必要があるとの説明であった。マオイストの若者達は、大きな声で威圧的な態度で金品を強要することもなく、冷静に話しあえば意の通じる若者だった。マオイストとの遭遇は、今回のトレッキングでの思い出になる珍しい体験であった。

ゴラパニから石段のつづく急な坂道をテイルケドンガへ降り、ゆっくり休養してから、翌朝にナヤプルに下山し、タクシー三台で一時間ほどでポカラにでた（一台八〇〇ルピー）。世界的な不景気と、マオイストの影響が重なった為か、ポカラのホテルもレストランも閑散としており、街行く観光客やトレッカーの姿も少なく寂しいポカラであった。ポカラで国際山岳博物館を訪れた。広大な敷地に体育館のような馬鹿でかい建物が建っていたが、展示物の充実にはまだまだ時間がかかりそうに思えた。マナスル初登頂者の今西壽雄さんの個人装備や、エベレスト清掃登山に努力している野口健の集めたゴミが展示されていたが、今後どのように展示物を充実させ運営していくかが、大きな課題となろう。

カトマンズを出てから二六日間の長いトレッキングであったが、天候にも恵まれ誰一人下痢や高度障害にもかからず、全員元気に完踏出来た楽しい山旅であった。

今回のトレッキングの費用は、航空運賃、タイ及びネパールでの全宿泊費、飲食費、ガイト及びポーターの費用、現地交通費、雑費等すべてあわせて、一人あたり二四四、五八一円であった。

ヨーロッパ山スキー報告

高尾　文雄

メイジュ、エクラン地域はヨーロッパでも南に位置するアルプスで、シャモニーやツエルマットと違い人工物が山の中には無く、人も積雪期にはほとんど入らない。日本人を見ることはまず無い地域だ。しかし、山は大変険しく素晴らしい。今回はここをスキーで挑戦しようということになった。計画ではドーム・ド・エクランの登頂と頂上からの滑降、メイジュのコルを北に越えてラ・グラーブへの滑降というハイレベルなものとし、メンバーも厳選された。

☆メンバー　奥村（リーダー）、高尾、及川、伊藤

☆時間記録

●二〇〇三年三月十四日

成田　二十時集合～二十二時出発

●三月十五日

ジュネーブ　八時半到着～十五時半出発～十八時ヴィジールでガイドと合流～二十一時ペルブウ（泊）

●三月十六日

九時十分出発～十時半エイルフォワッド～十四時セザンヌ小屋（泊）

●三月十七日

五時五十分出発～八時氷河末端～十時半一名ヘリで収容～十四時十分エクラン小屋（泊）

●三月十八日

八時半出発～九時五十分ブラン氷河小屋～十一時四十分エイルフォワッド～十二時四五分ペルブル十五時～十六時半ラグラーブ十七時半～十九時ベラルデ（泊）

●三月十九日

十時十五分出発～十一時ポンピエール氷河出合～十二時三五分シャテルレ小屋（泊）

●三月二十日

五時五分出発～七時五十分プロモンティアール小屋八時五十分～九時四五分メイジュのコル十時十五分～十一時二十分シャテルレ小屋十二時五十分～十三時半ベラルデ（泊）

●三月二十一日

七時四十分出発～八時四十分レザルプスキー場～十一時ラウズ山～十三時二十分ラトー西峰～十六時ラ・グラーブ

●三月二十二日

八時二十分出発～十時半オレル十一時～トロワバレースキー場～十三時半タニヤ（シャンパニー、ジュネーブ、パリ経由で二三日夜に帰国）

☆報告

●三月十四日（金）

夕方六時まで会社で仕事をして、成田へ移動。荷物はほとんど前もって送ってあるので、

小さなザックひとつだけで都心のラッシュも問題なかった。八時に着くと先にみんな着いていた。夜十時のフライトは初めてで、成田が閑散としているので驚いた。

●三月十五日（土）晴れ

ほぼ定刻の朝四時半にパリへ着いた。ヨーロッパについていえば夜行便は楽である。昼間の便より時差が感じにくい。空港はイラク戦争前で厳戒態勢であった。七時の飛行機でジュネーブへ飛んだ。予定通り八時半にジュネーブに着くと、これも予定通り今回のコーディネーターの佐々木さんが待っていた。一年ぶりの再会を互いに喜んだ。

みんなで荷物が出てくるのを待ったが、いっこうに出てこない。結局預けた九個のバック、スキーは一つも出てこなかった。同じ飛行機で来たかなりの人が同じ状況であった。

早くも空港で佐々木さんの出番が来た。事務所で聞いても荷物がどこにあって、いつ着くか要領を得ない。結局荷物が来るまで空港で待機することにした。

午後からの二便ですべての荷物がくることがわかり、待たせていた送迎車でジュネーブまで観光することにした。レマン湖のほとりで降りて、旧市街まで散歩しウインドウ・ショッピングを楽しんだ。何回もジュネーブには来ているが、観光したのは初めてだった。

ジュネーブ駅のすぐ前にある中華料理屋で昼食をとり、空港に戻った。言われたとおり、二便にわたってすべての荷物が着いた。時間は三時であった。七時間も待たされたことになる。気を取り直して送迎車にて出発。

グルノーブルから少し行った古城のある町、ヴィジールで今回のガイド二人（アンドレとセドリック）をピックアップした。アンドレはこれまで二回ガイドをお願いしている。セドリックは初めてである。アンドレ四四歳、セドリック三十歳。ともに実力者である。

ラ・グラーブにつくころにはすっかり日も暮れていたが、月明かりで盟主メイジュがよく見える。これから行くルートを車から降りて説明してもらえた。

ラ・グラーブから峠を越え南下してエクランのブラン氷河への入り口にある小さな村ペルブウの民宿に着いたのは九時を過ぎていた。すぐに山に持ち込む荷物と、ラ・グラーブにデポする荷物に分ける。ここで問題が発生した。われわれが日本から持ち込んだ食料をガイドが重くて嵩張るので全部は持てないと言い出したのだ。事前に旅行会社経由で食料計画表と重量を送っておりガイドにもOKが取れていたと思っていたのだが、まったく連絡が入っていないようだった。

ガイドはロープやその他のギアでザックは満杯でザックには入らないと言っている。ここでカンカンガクガクの議論になったが、仕方なく何とか量を減らし、みんなで分担して持つことにし収まった。

荷分けが終わり食事にありつけたのはすでに夜中になっていた。地ワインを飲みながらグリルされた地鳥を頂く。大変長い一日であった。ただ、天気がこれから一週間良い予報が出ているのが救いであった。

●三月十六日（日）快晴

アルプスはここ一カ月半ほど雪らしい雪が降っておらず、ここ一週間は晴天が続いていたらしい。またこれからもしばらく好天が続くという。大変ラッキーであるが、雪質の方は朝硬くクラストして、午後からはボソボソになるという悪雪であった。しかも風もなく大変暑い。日本で言えば五月連休後半の気温である。

今日の行程は短いので出発を遅らしゆっくりする。すべての荷物をザックに入れると満杯になった。ただし、日本から軽量化を目指していたので重さは感じない。今日は暑くなりそうなので、その分着るものを担がねばならず、嵩張った。

九時に出発。正面にペルブウ山を見上げながら、林道を谷に沿って少し遡ると、すぐに車止めがあり雪が出てきた。三十分程スキーを担いで歩いていったところからシールを貼った。

のんびり、ゆっくりと進んでいく。途中のエイルフォアッドには一軒だけカフェが営業しており、ノンアルコールビールで乾杯してゆっくり山を眺めた。ペルブウはすごい岩山で、急な岩稜が何本も派生している。

ペルブウを横に見ながらシールでゆっくりと進んでいくと目的のセザンヌ小屋がある小さな林が見えてきた。ここには夏には大変賑わうだろうロッジが何軒もある。

冬小屋はその真ん中にあり、石造りでなかなか立派であった。

夕食はわれわれがアルファ米とスープに海藻サラダといったすべて乾燥食品。ガイドは

チーズ、サラミ、スープ、パスタ類といったまったく違うものを食べていた。

水は周辺の雪を溶かして、トイレは小屋の周りで適当に始末するといった日本と変わらないものだった。

小屋は無人にしては日本に比べ格段に暖かいもので、ベッドにはマットレス、毛布が完備されていた。また大変清潔な小屋だった。炊事は決められたステンレスのテーブルの上だけで行い、食事を摂る大きな木の机では行わない。

夕方明日行くルートを眺めると、いったいどこを登るのかというような厳しいセラック帯が見える。

●三月十七日（月）快晴

日が昇る前五時五十分に出発。ブラン氷河の右岸へ大きく左からまわりこんで取り付く。ゴルジュのようなところを岩壁と岩壁の間の少しゆるくなった斜面をトラバースする。雪面は硬くクトーを使って登る。

次第に傾斜は急になるが、ジグザグを切ってシールとクトーを使い上る。滑り落ちると谷底まで止まらないだろう。雪が硬くて所々ではクトーが浮いている。一箇所急なところはスキーを脱いで両手にスキーを持って坪足で直登した。そこで一人がクトーを誤って落としてしまった。クトーがないと今後の山行にかなり影響が出る。

そこで、ガイドが一人谷底へアイゼンに履き替えて探しに降りて行った。首尾よく見つけ、すごいスピードで我々を追いかけてきた。ついでにもう一人のガイドが先ほど誤って落としたヘッドランプも回収してきた。

セラック帯に入り氷河の右岸を登る。夏道は左岸にあるが、右岸が近道だ。先を見るとかなりの傾斜で登っている。上部からブロックが落ちてくる危険性があるのでゆっくりとした通過は禁物で、すばやく休まず通過する必要がある。この辺まで来ると日も高くなり大変暑くなった。汗がどんどん出て体もだるくなってきた。

急にメンバーの一人が体調不良を訴えた。暫く休んで様子を見たが、この先を考えてここでリタイアするということになった。すぐにガイドがヘリを呼んだ。

十五分くらいでヘリが来て彼を回収してブリアンソンの病院へ向かい飛び去って行った。時間も遅くなり我々のルートの上からブロックがいつ降ってくるとも限らない。ゆっくりだが休まずジグザグを切って登る。かなり急な斜面を登った後右へトラバースし、ルンゼ状を登りきるとやっと休めるところがあった。ヘリへの収容を担当して遅れていたセドリックが追いついた。すごいスピードだったが、汗をかいていなかった。

そこから広い氷河をしばらく登ると氷原のようなところに出た。氷原の対岸の高台にエクラン小屋が見えた。氷原の左奥にはエクランがそびえていた。まっすぐ氷原を横切り、エクラン小屋を目指す。

エクラン小屋の真下でスキーを脱いでデポし、坪足でステップを切って登り始めたときに、ガイドのセドリックが急に倒れた。すぐにアンドレが降りてきて介抱しようとしたが、痙攣が激しくヘリで病院へ収容することになった。

ガイド一人、メンバー一人の二人を一日の間にヘリで下山させる一大事となった。他のメンバーはエクラン小屋まで上がり、明日からの行動を小屋で話し合うこととなった。エクラン小屋はブラン氷河から約百五十m上がったところにある。氷河の後退で標高差がついてしまったようだ。大変大きな小屋で、夏はかなり賑わうようだが、今はイギリスから来た二人組みだけが同宿だ。小屋からはエクランが正面に見える。明日登る予定になっているドーム・ド・エクランの氷河は大変急で途中には今にも落ちてきそうな懸垂氷河がある。実際落ちた跡が氷河上に何筋も付いている。いつもと違いかなり危険な状態のようだ。隣のイギリス人パーティーも登頂はあきらめたとのこと。

天気は良くて最高の眺めを楽しみながら各自汗でぬれたものを窓から外に出して乾かした。ヘリでセドリックを送り出したアンドレが小屋へ上がってきて、これからの行動を話し合った。その結果、以下のことが決まった。

一、ガイド一人ではドーム・ド・エクランはおろかエクランのコルも越えられない。

二、ここからペルブウに下るにしても、登ったルートはガイド一人では無理で、左岸の夏道ルートを滑る。

三、その後、明日宿泊予定のベラルデへは車でラ・グラーブ経由でぐるっと下を周ってはいる。

四、メイジュのコルまでは行けるが、それ

を越えていくルートはガイド一人では無理なので、往復となる。

五、その代替としてレ・ザルプのスキー場からメイジュのスキー場へ滑り込んでラグラーブまでのツアーは可能。

夕日が周りの山を染めていく。素晴らしい景色を堪能でした。エクランには少し雲がかかり、明日の天気を心配させた。

●三月十八日晴れ

雪が緩むのを待ってゆっくりと出発。小屋からはアイゼンを履いて出発。雪面が少し急で硬いので後ろ向きになってピッケルのピックを刺しながら慎重に降りた。

デポしていたスキーに履き替え滑り出す。ガイドからは転ばないようにスピードを落とし、慎重に滑るように言われた。少しブレーカブルクラストになっていて滑りにくく、緊張した。ブラン氷河小屋までは広く、傾斜も緩かったのでクレバスにだけ気をつけて滑った。

この下は急でクレバスも多く、下手に転ぶと滑落して命取りになる。ここで雪が緩むまで時間待ちをした。昨日一緒になったイギリス人の二人ともここで再び出会った。

二十分後に出発し真下のセラックだらけの氷河に飛び込む。ガイドの通りに滑り、ゴルジュのすぐ上で右岸に渡り昨日の登りのルートに合流した。セラックになった氷河の右岸上方の急な斜面をギルランデしながら滑る。ここでは転倒は許されない。

慎重に滑り降りセザンヌ小屋付近まで来ると、やっと安心して滑るとこが出来るようになった。快調に飛ばしてエイルフォワッドで行きに寄ったカフェで一休みした。そこで電話をして車を手配し、ヘリで収容されたセドリックとメンバー一人の安否を聞いた。二人とも元気になり、退院したと聞いて安心した。

ペルブウまで滑り、車を待つ間二日前に泊まった宿泊所で遅い昼食をとった。メインはマスが出てきて大変おいしかった。地ワインも飲んでゆっくりした。

車でベラルデに向かって出発。途中で昨日ヘリで収容されたセドリックをピックアップし、ラ・グラーブではヘリで収容されたメンバーが泊まっているホテルに寄って荷物の整理をした。今後の計画変更も再度打ち合わせた。

結局、ガイドは二人、メンバーは三名、ルートはベラルデからエタンソン谷をメイジュのコル往復。レ・ザルプからラトーに登頂し、ラ・グラーブまで滑り降りる。

ベラルデまで車を飛ばしたが、まだ道は公式には開いていない。除雪はされているとの情報なのでいける所まで行ってみることとした。メイジュをぐるりと周って反対側へ行く。ドライバーのおかげで無理やりベラルデまで何とか車で入れた。途中のサンクリフトフには小さな村だがメイジュ関連の山岳博物館があった。ベラルデは冬には全く閉ざされた村になるが、そのまま残る人もわずかにいる。宿泊所はわずかに一つが開いていた。まるでアルプスの少女ハイジに出てくるような村で、宿泊所のおじさんは漫画に出てくるおじいさんそっくりであった。達磨ストーブが閉ざされた場所いるなんともいえない雰囲気をかもし出していた。その傍らにあるテレビでは衛星放送でイラク戦争の開始と戦況を刻々と伝えていて、すごい違和感を感じた。

●三月十九日快晴

ゆっくりと出発。エタンソンの谷を景色を見ながらゆっくりと登っていく。静かな谷で人の気配がない。

ポンピエール氷河の出合ではエクランが高く、軍艦のように見えた。すごい岸壁を纏っている。本来の計画ではエクランのコルを越えてこの谷を滑ってくることになっていた。

再び歩き始めると、正面にメイジュが左右に堂々とした岸壁を広げて聳えている。左の低くなった「窓」が目指すメイジュのコルだと言うことはすぐにわかった。

快晴の下、周りをすごい山々に囲まれ大変静かなエタンソン谷を歩くと、大変気持ちがいい。しばらく行くと谷の真ん中にシャテルレ小屋が見えてきた。

早く着いたので、机と椅子を外に持ち出し、みんなで無風快晴の下でランチを楽しんだ。日が当たっていると暑いくらいだ。思い思いの午後を過ごす。ガイドたちは小屋の壁をボルダリングしていた。伊藤さんと私は近くの斜面を一本滑った。また、ビーコンを使った捜索訓練も行った。デジタル、アナログの違いや、最新の捜索方法を教わった。

小屋はとても快適で、大きなベッドがあった。夜、外に出ると星が本当にたくさん見えた。日本ではどこの山に行ってもなかなかこれほど澄んだ空にはならないので、これほどの数の星は見たことがない。

●三月二十日快晴

日が昇る前に出発した。ヘッドランプをつけて歩くが、涼しいので良いピッチで歩ける。夏のコースタイムでプロモンティアール小屋まで行けた。ここで大休止して雪が緩むのを待ちながら、周りの景色を堪能した。小屋は小さくて岸壁に引掛かけているような作りで、手すりの真下は目もくらむような絶壁だ。小屋に入るときも雪の急斜面をトラバースするのがすごく怖かった。

再びメイジュのコルに向けて出発した。直下でスキーをデポし、アイゼンとピッケルでアンザイレンして登る。三人一組になって急な雪面についたステップを辿る。左右は見上げるような岸壁だった。

コルから向こう側を覗くと、こじんまりしたラ・グラーブの町が見えた。遠くにモンブラン、グランドジョラス、グランカッセなどが見えた。計画でコルから滑り降りるルートを見たが、尾根の向こう側は見えなかった。

記念撮影をしてから、同じようにアンザイレンして下った。デポ地からはスキーに履き替えていよいよ滑降となった。

太陽で雪面も適度に緩んで滑りやすくなっていた。ガイドに付いてどんどん滑っていく。セドリックはモーグルのナショナルチームに所属していたので大変スキーがうまい。アンドレはガイド特有の堅実なすべりでこれも大変うまい。

あっという間にシャテルレ小屋に着き、小屋でのんびりしていたら今日は数名が登ってきた。山スキーで中高年が多い。シャテルレ小屋からベラルデまでのんびりと滑って降りた。途中でエクランを見て再びすごい山だと感心した。

ベラルデの宿泊所に着いてから外にテーブルを出してお昼ご飯を食べた。気持ちのいい午後だった。ビールで祝杯を挙げた。

テレビで見るヨーロッパのリゾートとはこんなものかと不思議な感覚になった。日が当たっていると暑いくらいなのだが、日が翳ったり雲に隠れるとたんに寒くなる。空気が大変乾燥しているからだろう。

夜になって隣のおじいさんが訪ねてきた。この人も冬になってもずっとこの村に残ってひたすら春を待っているらしい。ひげが大変立派で板垣退助のようだった。冬の間家で何をしているのかと聞いたところ、手を組んで親指をぐるぐる回していると言っていた。飽きると一週間交替で回す方向を逆にしているそうだ。

●三月二十一日快晴

チャーターした車が迎えに来た。昨日から正式に道が開通したそうだ。車でサンクリフトフまで行ってお茶を飲んで時間をつぶす。ここのカフェのおばさんが車をチャーターしてくれたらしい。セドリックがお茶をご馳走してくれた。

レザルプのスキー場の裏側からゴンドラで上がった。山の上にはベラルデとは対称的に一大高級リゾートスキー場になっていた。大勢の人で賑わっていた。ゴンドラとTバーを乗り継ぎ最後は大型雪上車に引っぱってもらい、ドームデラウズの頂上まで行った。

頂上からはエクラン、メイジュを始めモンブラン、グランドジョラス、まで見渡せた。ラ・グラーブからのスキー場とここで繋がっている。ラ・グラーブのスキー場に着くとラ・グラーブのホテルで待機中のメンバーに偶然出会った。

ここからオフピステで氷河をクレバスを避けながら滑り、ラトーの麓まで行った。そこからシールでジグザグに登り、コルに出た。そこにスキーをデポし、アイゼンに履き替えてアンザイレンしてピッケルを持って登った。

三人一組で間をあけてコンティニアスで登る。ちょっとした岩峰が続く。ナイフエッジになっていて高度感も抜群だ。難しいところは短く切ってガイドが確保してくれる。

ラトーの西峰まで登りここで終了。鋭い岩峰が終点だった。いつものことながら兼用靴で岩を登るのは大変苦労する。ガイドは慣れているのだろうが難なくこなしていた。

同じようにしてデポ地まで戻り、スキーに履き替えて滑降開始。新雪ではあったが雪が悪く苦労する。途中で日陰に入りパウダーとなったので快調に滑れた。今回初めてのパウダーであった。

ラ・グラーブのスキー場でもう一人のメンバーと合流し一緒にスキー場をラ・グラーブまで滑った。このスキー場は整備したコースがなく、リフトもない。ゴンドラがあってどこでも滑れるようになっている。みんなでスキー場をがんがん滑る。右手にはメイジュの雄姿が見える。完全なオフピステのようなスキー場である。メイジュからの氷河が時々崩

れてくる。近年氷河がずいぶん後退したらしい。

スキー場は途中からは雪が少なくなり、かなり粘って雪を拾いながら滑ったが、途中のゴンドラ駅まで滑ったところであきらめて、ゴンドラに乗ってラ・グラーブまで降りた。

ホテルの前のオープンカフェにみんな集まり、ビールで乾杯した。その後食事前に高台にある教会まで行ってみた。落ち着いて素晴らしい雰囲気だった。対岸にはメイジュが眼前に見え、田舎のこじんまりした町を散策して、贅沢な時間を過ごせた。

ラ・グラーブのホテルではガイドのアンドレの奥さんが待っていた。夜は一緒に食事をした。久しぶりにちゃんとしたところで食事ができた。

●三月二十二日晴れ

私は今日が最終日である。車でブリアンソンを経由して山を越え、イタリアに一度入って大きなトンネルを越えてトロワバレーの南側の町オルレまで行く。

オルレからゴンドラとリフトで山を越えバルトランスに滑り込んだ。久しぶりのバルトランスで懐かしかった。この広さと景色にまた驚かされてしまった。しかし昨日までの景色とは全く険しさが違っていた。やはりここはスキー場である。

バルトランスからメリベル、メリベルからクシュベルと快調にスキーを飛ばして行く。短時間ですごい距離を滑っている。このトロワバレースキー場はすべてのコースの滑走距離を合計すると六五十キロにもなるそうだ。東京から岡山くらいまで行くだろうか、すごい規模である。

雪不足のためオフピステにも入れず、また予定のボーゼルまでも滑れずにクシュベルのすぐ横にあるタニアでスキーは終了となった。

オープンカフェで車を待つ間にビールで乾杯し、これまでの山スキーの感謝と、みんなとの別れを惜しんだ。

シャンパニーまで車で行くと、後続の班がすでにホテルに到着しており歓迎を受けた。後片付けをしながら、みんなとこれまでの山スキーの話をして別れを惜しんだ。

一人車に乗ってアルベールビル、アネシーといった素晴らしくきれいな町を通ってジュネーブまで行った。ジュネーブからパリ経由で翌日の夜に成田に無事着いて終了した。

以上

ヒュッテ管理苦労話

笹ヶ峰ヒュッテ管理委員会　秋田　雅規

笹ヶ峰ヒュッテは一九九九年十一月に竣工し、今年五年目に入りました。四年間の運営・管理について、苦労話でもという依頼に答えて少し書いてみます。

これまでに起きた問題（および対応策）をまず列挙しますと、

・トイレが詰まる（掘り返して掻き出すも再発し、結局新たに便槽を築造）

・給排水管の凍結（二度にわたり改善工事実施）

・汲み取り車の進入困難（玄関進入路の改良）

・電気関係（台所の容量増加、自動復旧ブレーカー設置）

不適切な使用による問題としてつぎのことが起きています。

・ドアの開閉の不具合

・床の焼けこげ事故

・ガラスの破損

また新築工事の延長として次のことをしています。

・避雷針の設置

・看板、テーブルなどの設置

・芝生回復工事

・環境の整備

・電話設置

以上は、設備にかかわる問題であり、重要なものとしてあと水源の問題（不安定な水量、腐植物が混じる）が残されているだけです。牧場小屋の水源を借用する案がありましたが、導水設備が長くなるため意外にコストがかかることが判明し、現在の取水位置に水槽などを設置する方向で、原さんを中心にして検討中です。

これらの問題は、おのおの対処すればよいことで、管理・運営委員も半ば（三分の一くらい？）楽しみながらやっています。必要な人数は集まっていますし、皆さんに喜んでいただければ苦労も吹き飛ぶというものです。

これから問題になるのは、日本の社会と同じで、①いかに安定した財政を築くか（＝安定した継続するお客さんを開拓するか）、②

いかに若い世代の担い手を開拓し育てていくか、だと思われます。①も②も若い力が必要なのは同じです。将来的には笹ヶ峰会会員以外の人材を頼みにしなければならなくなるでしょう。

管理・運営委員会としてはこのような認識のもとで、いろいろな行事をしたり、パンフレットを作成するなど努力をしていますが、反応はかんばしいとはいえません。毎年の有料の利用数は五七〇～六百人で安定していますが、夏・秋の一般開放期間中でも平日は閑古鳥が鳴いています。新しい若いお客さんはきていません。ヒュッテの性格上、安易に一般のPRをするわけにはいきません。

こんなに素晴らしいヒュッテになったとは思わなかった、とよく聞きますがこの言葉には三つの意味があると思います。素晴らしい設備のヒュッテができた、高さと広がりを兼ね備えた眺望が素晴らしい、そして植林された林が育ち新しい景観が育っているということです。あらためて皆様にお願いしたいのは、一度ヒュッテに来て下さい、さまざまの季節に来てみて下さい、周囲の若い方にPRをしてくださいということです。よろしくお願いいたします。

【理事会決議録】

日　時　平成十六（二〇〇四）年三月二八日（日）午後一時～午後三時

場　所　京都市左京区田中関田町　京大会館二一七号室

出席理事　木村雅昭、田中昌二郎、福嶌義宏、上田豊、横山宏太郎、松沢哲郎、松林公蔵、吹田啓一郎、竹田晋也　以上九名

委任状によるもの　牛田一成、中川潔、永田龍、人見五郎、山田和人、高尾文雄、清水浩　以上七名

欠席理事　なし

議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案

平成十六（二〇〇四）年度事業計画について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十六（二〇〇四）年度事業計画に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案

平成十六（二〇〇四）年度収支予算について

理事竹田晋也によって作成された平成十六（二〇〇四）年度収支予算に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成十六（二〇〇四）年三月二八日

事務局長　吹田啓一郎

お知らせ

小林尚礼会員により，梅里雪山の捜索活動に関するレポートが、以下の雑誌に掲載されました。

・「岳人」六月号　（五月十五日発売）

・Japanese Alpine News Vol.5（五月中旬発行）日本山岳会の英文会報です。ご覧になりたい方は同会事務局まで。

なお、いずれも中国側の承認も得て書かれたものです。

事務局　吹田啓一郎

会員動向

栄　誉

荻野和彦氏は、東マレーシアにおける熱帯雨林生態研究に対して「第十二回松下幸之助花の万博記念賞」を受賞されました。

なお、この賞は過去に、北村四郎先生（第一回）、四手井綱英先生（第二回）が受賞されています。

編集後記

立山連峰・大日岳雪庇崩落事故に関連し、今春大日岳への意欲的なスキー登山をされた荻野和彦、岩坪五郎両氏に執筆をお願いしました。登山記録だけでなく、広い分野に亘る考察を含んでいます。ご精読下さい。

笹谷哲也氏は、この数年、青海省、四川省、チベット自治区、雲南省や川蔵公路の奥地等々を、縦横に旅しておられます。今回、新しい旅行の合間を縫って、貴重な体験の一端を纏めて頂くことが出来ました。まだ素晴らしい山、谷、人が残っている地帯への絶好の誘惑の書になったとおもいます。

「アンナプルナとマオイスト」では、「アンナプルナ日記」の世界が思い出されます。最近、ネパールの治安が益々悪化しているようなのが心配です。

高尾文雄氏の「ヨーロッパ山スキー報告」は、前号に原稿を頂きながら紙幅の関係から、今号へ繰延べをお願しておりました。今回メンバーのリタイヤーがなければ、記録に残るスキー山行だっただけに残念です。

笹ヶ峰ヒュッテの管理・運営について、非会員ではありますが委員の中心である秋田雅規氏に、その苦労話の数々を、ハッキリと、縷々語って貰おうと寄稿をお願いしました。ところが、奥ゆかしくその一部しか語っておられないように思います。

ただ、氏の願いのように、今年のゴールデンウイーク期間中、笹ヶ峰ヒュッテは満員盛況でした。益々賑やかに山を楽しみ、年代を超えて交歓できる場となる事を祈ります。

次号の原稿締め切りは八月十日、発行は九月中旬の予定です。広く会員の皆様にご執筆頂きたいと思っています。奮ってご寄稿下さい。

（田中昌二郎）

編集委員　田中昌二郎
発行日　二〇〇四年五月末日
発行所　京都大学学士山岳会
〒六二一―〇〇二二　宇治市五ヶ庄
京都大学防災研究所
吹田啓一郎　気付
製作　京都市北区小山西花池町一―八
（株）土倉事務所